

Title	人々はなぜ「乞食」に施しをするのか?: 体制転換後のウズベキスタンにおける物乞い-施し交渉の分析
Sub Title	Why do people give alms to beggars? : the interaction of "begging-alms" in post-Soviet Uzbekistan
Author	和崎, 聖日(Wazaki, Seika)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.93- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人々はなぜ「乞食」に施しをするのか？

—体制転換後のウズベキスタンにおける〈物乞い - 施し〉交渉の分析—

Why do people give alms to beggars?

—The interaction of 'begging-alms' in post-Soviet Uzbekistan—

和崎 聖日

1. はじめに

現在のウズベキスタン共和国は、8世紀のアラブ侵入以来、中世にはイスラーム世界の一大中心地として栄えた元来イスラームを基調とする地域である。同地域は、1917年のロシア10月革命と1924年の〈民族 - 国家別境界画定〉による国民国家化以降、社会主義理念に基づく無神論政策や近代化の展開などにより、社会＝文化的な大変容を経験したといわれる。その後、ゴルバチョフのペレストロイカ改革を契機とする1991年のソ連解体（以下、体制転換と略して記す）の流れの中で、ウズベキスタンは従来の国家枠組みを引き継ぐ形で独立するに至った。

しかし、この体制転換は、他の旧ソ連地域と同様に、ウズベキスタンでも経済的不平等（多数の貧困層と少数の富裕層）や生活水準の低下を引き起こした。現在も、多くの人々が、金銭と仕事が集まりインフラも整備された首都タシュケントに、都市移民やマルディコル *mardikor*（日雇い労働者）として生活向上を目的に押し寄せている。こうしたなか、物乞いによって生活を営もうとする人々、つまり「乞食」も年々増加しているといわれる。

「乞食」たちを観察する中で、筆者にとって最大の驚きだったのは、上述のような苦しい生活状況に直面している人々が、老若男女を問わず、街の「乞食」に〈すぐ〉に施しすることだった。筆者の観察（2分間計測）では、金曜礼拝時にモスク周辺で物乞いをする女性には27人の男性が、30人の乗車する地下鉄車両内で物乞いをする赤ん坊連れの若い女性には7人の男女が、施しをした。もちろんタシュケントで必ずしも上記のような頻度で施しがなされる訳ではない。また、中央アジアの〈ジプシー〉といわれるルリ *lo'li* を毛嫌いし、ルリ以外の民族出身者にしか施しをしないという人々も少なくない。しかし、こうした状況を考慮しても、〈すぐに施しがなされる〉という素朴な印象は強烈なものだった。

ウズベキスタンの「乞食」たちは、他のイスラーム世界の諸地域と同様に（保坂 1994；西川 1992）、通行人からの施しにより、時に自らの経済生活を可能としている（和崎 2007）。本稿は、筆者のいわば〈カルチャー・ショック〉ともいえる経験に基づき、〈人々はなぜ施しをするのか〉という問いを、ウズベキスタンの歴史・社会＝文化的文脈を踏まえながら、〈物乞い - 施し〉交渉の分析から明らかにすることを試みるものである。

2. 先行研究と目的

従来の研究において<人はなぜ施しをするのか>という主題の解明は、主に動物行動学、心理学、社会学、人類学の分野からなされてきた。そこで記述されるアメリカやナイジェリア、ロシアなど世界各地での研究成果を簡潔にまとめると、次のように要約できる。施しは、<普遍あるいは社会構築的解発因>を資源とする<印象の操作>を通して制定されうる<感傷の共同体>の中で、潜在的贈与者が<偽善者>などスティグマを被らない限りにおいて実現されるものである (Butovskaya, etc. 2000; Goldberg 1995; Heilman 1971; Igbiovina 1991 など)。

<普遍的解発因>とは、年齢・生物学的性差・赤ん坊・怪我・障害・通行人より低い位置・差し出される手・悲しげ又はふつうの物腰・モノや音楽の交換など、潜在的贈与者から施しを誘発する通文化的な要因を指す (Butovskaya, etc. 2000 : 158-160)。<社会構築的解発因>とは、歴史や戦争に関する勲章・宗教的シンボルなど、施しを誘発する文化特殊的な要因を指す (Butovskaya, etc. 2000 : 158-160)。施しはまた、対象地域の生業形態 (農業か否か) や政治体制 (社会主義か否か) の差異によっても、潜在的贈与者の<平等>志向の内面化の程度に基づき、規定される傾向をもつとされる (Butovskaya, etc. 2000 : 179)。

これら一連の研究の問題点は、施し行動²⁾の解明が、贈与者の側からではなく、主に「乞食」の側に重点が置かれてきたことである。贈与者の行動は物乞いパフォーマンスなど周囲の状況に徹底的に規定されるという視点から描かれてきたのであり、彼ら自身の視点に重点を置いて描かれてはこなかった。これら先行研究の分析からは、<偽善者>としてみられることの<気まずさ>などスティグマに由来する施しへの躊躇を超えて、贈与者は何をを得るのかという問いに答えることは困難だろう。彼らが経験する<内的充足>に触れることなしに、施し行動の本質を解明することはできない。本稿では、ウズベキスタンの文脈を踏まえつつ、物乞いパフォーマンスだけでなく贈与者の主体性にも重点を置き、施しをすることで彼らが何をを得るのかという問いを行為者内部から考察することを目的とする。

そこで本稿では、まず、<乞食><物乞い><施し>という3つの概念に焦点を当てる。第1に、施しは<乞食の物乞い>に対して行われる訳だから、<乞食>と<物乞い>という2つの概念が現代ウズベキスタンの文脈でどのように認識されているかについての考察を深める必要がある。第2に、<乞食の物乞い>に対して行われる<施し>は、他のイスラーム世界の諸地域で広範にみられるように、<施しをめぐる行為の諸規則 (= 宗教規範)>に規定されることが推測される訳だから、<施し>という概念が同様にどのように認識されているかについての考察を深める必要がある (5節)。

次に、<物乞い - 施し>交渉という実際の相互行為場面に焦点を当てる。第1に、相互行為の中での実際の施しは具体的な「乞食」の物乞いに対して行われる訳だから、彼らの<物乞いパフォーマンス (= 物乞いの方法として観察される主張、外観、身体の所作などその総体)>を分析する必要がある。第2に、具体的な「乞食」の物乞いに対して行われる<実際の施しのあり様>を<施しの動機付け>と<施し行動の観察>から分析する。そこでは、<言説的なふ

るまい>と観察の中で発見される<行動を実際に呼び起こす条件>との落差に注目する(6節)。

3. 調査の期間と方法

調査の期間は、2002年から2003年間の約7ヶ月間である。調査の方法は、参与観察と聞き取りである。物乞いの主張内容の聞き取りは、17人の「乞食」から行った。使用言語は、ウズベク語とロシア語である。<物乞い-施し>交渉に関しては、17の事例を観察した。以上の対象は無作為に選択した。ただ、後者の相互交渉の観察では、対象となる「乞食」をウズベク人のみに限定している。多民族都市タシュケントにおいて、ウズベク人の「乞食」のみを対象とする理由は<民族的えこひいき ethnic nepotism> (Butovskaya, etc. 2000) の可能性を分析から排除するためである。そのことにより、施しの可能性が対等とみなしうる同一民族内において、民族を理由としない施しの論理を析出することを試みた。

一方、<乞食><物乞い><施し>をめぐるイメージと認識に関して、男女24人に聞き取りを行った。回答者の職業は、学生、露店商、無職、日雇い労働者、車の整備工、警察官、会社員、ダンスの先生、ムッラー-mulla (イスラーム知識人)、教員、年金生活者であった。施しの頻度をめぐるアンケートでは、10~80代の男女85人に聞き取りを行った。回答者の職業は上記に加え運転手と軍人であった。施しの動機付けに関しては、男女22人に聞き取りを行った。回答者の職業は、上記(整備工とムッラーを除く)に加え、食堂従業員、語学講師、スポーツ・センター講師、主婦、作家、銀行員であった。以上の対象は基本的に無作為に選択したが、男女比と世代分布がある程度均等になるように試みた。

4. 調査地概要

独立以降、首都タシュケントはソ連型とは異なる<新しい近代>の恩恵を唯一享受している相対的に裕福な地域である。その街並みは、単調な旧ソ連型の集合住宅群や広い道路など一見閑散とした印象を受けるが、スラヴ系住民の割合が高いソヴィエト・ヨーロッパ風の新市街を中心に華やかだ。ソ連時代の遺産として現在でも、教育・文化組織が数多く集まっている。また、体制転換後のタシュケントは、非現地人ロシア語話者の割合が高いことからそれへの反発が高まり、ウズベク民族主義の中心地の1つとなった(Agadjanian and Makarova 2003: 463)。本稿では、ウズベク人の割合が高いタシュケント旧市街・S地区のGバザールとそれに隣接するモスクを主要な調査地とした。そこは、商売人の呼び声や大音量の音楽、羊肉を焼く煙や匂いなど新市街とは異なる喧騒で賑わう場所である。

5. <乞食><物乞い><施し>をめぐるイメージと認識

(1) <乞食><物乞い>のイメージと認識

ソ連時代の<乞食>といえば、中央アジアの<ジプシー>・ルリであったといわれる。2度の戦後(第2次世界大戦とアフガニスタン戦争)に急増した傷痍軍人や、デルヴィーシュ

dervish (スーフィー教団の住所不定の修行者) が時に物乞いをしていたとも語られる。

ソ連時代は<モノは少ないが物価が安く生活が安定していた>時代だったといわれるが、当時の<乞食>をめぐる上記のような社会的表象の背景には2つの歴史・社会=文化的要因がある。第1に、集団化政策による労働義務化および近代(産業推進)化政策による雇用増加の結果、現実に生活水準が向上した点である。第2に、ソヴィエト近代は因習・慣習との闘争の時代だったと指摘されるように(Northrop 2003 など)、<物乞い>も克服されるべき<悪習>として犯罪化された点である。ウズベク社会主義共和国内務省は、1971年、当時も根強く活動していたとされるデルヴィーシュの物乞い活動を主に取り締まり、彼らを定職に就かせるよう、「放浪に対する闘争を高めることに関して」と題する法案を提出した(Ro'i2001: 582)。これはまた反イスラーム(無神論)だけでなく労働力の合理的動員を目的としていた。これら政策と生活をめぐる変化の結果、ソ連時代、「タシュケントで物乞いをする」と逮捕されていた。健康なら必ず働かなければいけなかった(ウズベク/60代/男性)、「物乞いをする必要はなかった」(左同/30代/女性)、「物乞いすることは恥ずかしかった」(左同/左同/男性)などと語られる。

では、体制転換後のタシュケントにおける「乞食」の概況とそれへのイメージおよび認識をみていこう。以下で示す現地の新聞記事(Abudullaev 2003)は、「乞食」の現状とそれに対する現地人の一般的心情をよく示している。

昔、乞食 *tilanchi* はふつうバザールでみかけられるだけだった。現在彼らを路上、地下鉄出口、駅や公共の場でみかけることは当たり前になった。最も残念なのは、昔このことをルリだけがしていたのに、今ではウズベク、ロシア、他の民族の人々が物乞いをしているのをよくみかけることだ。彼らがとても増えた理由は、経済が悪くなったからなのか、お金を稼ぐのが簡単になったからなのか?…(省略)…。買物をしている時、汚い服を着て「施し *sadaqa* をください」といっている数人の子供をみかけた。中年の女性が施しを与えようと財布を出すと、彼らは財布を盗んだのだった。彼女はその後声を上げて「あなたの家に火事が起こるわよ。あなたたちに羞恥心はあるの?」といった…だが、もう仕方なく、子供たちはあちこちへ逃げていた。「乞食に羞恥心はあるか?」『独立新聞』より)

体制転換後の現在は<モノは増えたが物価が上がり生活が苦しくなった>時代だとよくいわれる。「乞食」の概況は上記のように一変し、現在のタシュケントで「乞食」はソ連時代から物乞いを生業とするルリと体制転換後に<転落>した多様な民族からなる人々³⁾、の主に2類型からなる(和崎 2007)。<乞食><物乞い>のイメージと認識をめぐって聞き取りを行なった表1から<乞食>のイメージをまとめると、以下ようになった。それは、盲人、障害者、ルリ、怠け者、老人、子供、赤ん坊を抱いた女性、ロシア人のおばあさん、身寄りのない人、嘘つき、偽障害者、生活貧窮者、富者などである。彼らが行う<物乞い>は、[事例 c]のように、

外観上障害がなく働けるのに働かないなど<排除対象の乞食>(ルリ、怠け者、偽障害者など)の場合、否定的に認識されていることが多い。逆に、[事例 k、u]のように、外観上働けないと推測できる<救済対象の乞食>(障害者、高齢者、子供、赤ん坊を抱いた女性など)なら、時代的共感とともに肯定的に認識されることが多い。

表1: <乞食><物乞い><施し>をめぐるイメージと認識 (n=23.筆者作成)

	民族	性別	生年(年齢)	職業	イメージと認識
a	ウズベク	男性	?(10代後半)	学生	盲人や障害者たちには、あげますよ。働けない人を助ける必要があります。
b	ウズベク	女性	?(10代後半)	学生	お金?あげるよ。なぜか?彼らは困っているから。
c	ウズベク	男性	?(20代)	学生	私たちのメンタリティーはいつも乞食 tilanchi に反対してきました。なぜなら、この人たちはいつも私たちの民族に恥をかかせてきたからです。障害者は許せますが、四体満足 to'rt mijjasi sog'の人が物乞いをしていることは考えられません。
d	ウズベク	男性	?(20代半ば)	露店商	お店によく来るよ。お金は、あげます。宗教でそういわれているからです。スンナ sunnat (預言者言行) だよ。
e	タジク	男性	?(20代)	無職	試験に受かりたいとか、そういう心配事がある時に、バス停などの場所でルリ lo'li が来たら、サダカ sadaqa (施し・任意の喜捨) をしなくちゃ、と思います。あと、友達が死ぬ夢とか、そういう悪い夢を見た時も、必ずサダカをします。
f	ウズベク	女性	?(20代)	学生	あげます。善行です。
g	ウズベク	女性	?(20代)	学生	私もあげます。ルリの人たちは、パスポートを持っていないし、仕事につけないから、物乞いをしているのかもしれないわ。
h	ウズベク	女性	?(20代)	日雇い労働者	乞食 gadoy にはいろいろな種類があります。例えば、盲人や障害者は多いですね。彼らは働けないので助けなればいけません。また、体が元気で働けるのに、障害があるようにみせて物乞いをする人もいます。そういう人たちやルリのような怠け者には、あげません。
i	ウズベク	男性	?(30代)	日雇い労働者	乞食 tilanchi というと、目の前に、破れた服で、老人か、子供か、赤ん坊を抱いている女性が浮かびます。物乞いは今とても広まっています。嘘つきで金持ちの乞食もい

					<p>ますが、本当の乞食はバザールでよくみかけます。ある盲人の乞食と会ったことがあります。彼の顔には、貧しさがにじみ出ていました。彼にとってこの世の中が真っ暗で、目がみえないということが、私の心に憐れみを感じさせます。彼はこの方法でしか、お金を稼げません。</p>
j	ウズベク	男性	?(30代)	車の整備工	<p>可哀想だから、お金をあげます。手や足が動かないし、働けないでしょ。ルリみたいな、怠け者にはあげません。ルリのオーミン omin (祈りの際の洗顔のような動作) は受けない方が良いという人もいます。彼女たちは、口だけで祝福の言葉 tilak を述べ、心では何も思っていないからです。あと、子どもが入学試験を受けたり、お父さんが病気だったりする時に、あげることもあります。あげなくても悪いことが起きる訳ではないですが、あげます。ウズベク人は、今経済も悪いし、仕事も少ないけど、でも、あげます。なぜか? 善行だからです。左に悪行を数える天使がいて、右に善行を数える天使がいて、右側が多い方が良いのです。親や隣人たちから、小さい頃から聞いていて、みんな知っていますよ。</p>
k	ウズベク	女性	?(30代)	露店商	<p>働けない人を助けてくなくてはいけません。私たちの国で年金がいくら知っているの?</p>
l	ウズベク	女性	?(30代)	露店商	<p>美しい娘とか、好青年には、邪視 yomon ko'z が来ます。美しくない娘には来ないわ。特に、子供たちに、邪視が、そういう目が来ないように、サダカをします。イッスルク issiriq (民間治療などで使われる草) も使います。火で燃やして邪視をなくすんです。悪い夢をみても乞食 nishiy にサダカをしないといけません。悪い事が起こらないように。サダカをしないと夢が実現してしまうことがあるからです。誰かから邪視を受けていると悪い夢をみやすいかもしれないですね。</p>
m	ウズベク	男性	?(40代)	警察官	<p>独立後のウズベキスタンは経済を作らなければいけない大変な時期にあります。物乞いをするのは家族で面倒をみる人がいない貧しい人たちですが、楽をしてお金を稼ぐために嘘をつき騙して物乞いをする人たちも増えています。本当に貧しいかどうかは、みればわかります。</p>

和崎: 人々はなぜ「乞食」に施しをするのか?

n	ウイグル	男性	?(40代)	会社員	憐れみの気持ちです。障害のある人やすぐ年をとっている人だったら、お金をあげます。元気なのに「お金をくれ」という人もいますが、彼らにはあげません。
o	ウズベク	女性	?(40代)	ダンスの先生	あそこに座っている人がいるでしょ。もしあなたがお金をもっているなら、あーいう病気の人や老人、子どもがいる寡婦、自分で生活ができない人たちにお金をあげなくてははいけません。あなたはお金に困ってないでしょう?あなたも少しあげなくてははいけません。もしあなたがお金を持っているのにあげなかったら、あなたがしていることは上手くいかなくなるでしょう。悪い夢をみた時も、その夢が実現しないようにサダカをしなくてははいけません。その夢の内容を他人にいつてはいけないし、水の流れる場所でその夢を思い出して、家を右足から出て、その後でサダカをします。
p	ウズベク	男性	?(50代)	会社員	お金をあげる理由?善行だからです。ウズベキスタンで物乞いをするのは商売みたいなものですが、でも、みんなあげます。
q	ウズベク	男性	?(50代後半)	露店商	もちろん、いつもあげます。お金はあげなければいけない。預言者がそういつています。
r	ウズベク	女性	?(50代)	露店商	乞食 tilanchi はとても多くなりました。いつもバザールで1人の女性をみかけるのですが、彼女は赤ん坊を抱いていて、子供はいつも寝ています。暑い太陽の日も汚い服で施しを求めています。人生が本当に嫌になります。子供の将来がどうなろうと関係ないみたいです。
s	ウズベク	女性	?(50代後半)	露店商	もちろん、あげます。必ずあげます、もしお金があれば。サダカです。
t	ウズベク	男性	?(50代後半)	ムッラー mulla (イスラーム知識人)	ルリや乞食 sadaqachi にはお金をあげない。彼らは、働けるし、働かなければならないからです。良くないひとたちだ、怠け者だ。盲人にはお金をあげなくてははいけない。盲人たちは、働けないから助けないとはいけないし、天国に運んでくれる人々だ。ムハンマドがそういつているし、ハディース hadis (預言者言行録) に書いてある。
u	タジク	男性	?(60代後半)	教員	私たちは今独立して貧しい時期にあります。これは避けられない。あなたたちにだって、こういう時期があった

					でしょう？ルリや健康なのに働かない人には、あげません。彼らは働かなければいけない。盲人や体が不自由で働けない人は援助を必要としているから、お金をあげる必要があります。
v	ウズベク	女性	?(60代)	年金生活者	朝起きて、ちょっと悪い夢をみたり、すごく良い夢をみたら、実現しないように、それか実現するように、サダカをします。1番良いのは、ルリではなく、盲人や体の不自由な人にあげることです。そういう人たちがいない時は、乞食 tilanchi にあげても良い。(なぜ?)天国に近いからです。
w	ウズベク	女性	?(70代)	年金生活者	私はお金をあげなければいけません。クルアーンとか、イスラームのことを少しでも知っている人にはお金をあげます。けれど、イスラームのことを知らない人には、ノン non (パン) しかあげません。なぜあげるか？私が死んで神様の所に行く時、日陰に行けるからです。

(2) <施し>をめぐる認識

ウズベキスタンのイスラームは、ペレストロイカ後期(1989年)に公式表明された「反イスラーム政策の停止」(小松 2000: 440)を契機に広範に再生した。この再生したイスラームは、独立後の<反ロシア・ソヴィエト>や<真正なウズベク>の価値を希求する時代的風潮の中で、自文化の見直しやそこへの自然な回帰として人々の生活へ深く浸透していった。こうしたなか、ロシア革命後に徐々に薄れていったとされる施しの習慣も体制転換後の経済悪化と一層の生活苦とに連動する形で復活してきている、と広く一般に認識されている⁴⁾。

<施し>を意味するウズベク語は、他のイスラーム世界と同じく、<サダカ sadaqa>の語が用いられる。だが、イスラーム世界一般で<サダカ>が<施しなど慈善行為一般>までを含むのに対し、現代ウズベキスタンでは<乞食への施し・任意の喜捨>に意味が限定されることが多い。サダカの意義とその実践の推奨は、現在、金曜礼拝での説教やその収録カセットなどを中心とする言説の流布により、人々の意識の上で広範に浸透している。では、<施し>概念が実際にどのように人々の間で認識されているのかをみていこう。

まず、施しの頻度をめぐるアンケートによれば、施しへの否定的見解は全体の約2割ほどであった。この結果がタシュケント全体の施しに対する実態そのものを必ずしも代表しているとはいえないが、<施し>をめぐる認識の傾向とその枠組みを示唆してはいよう。

次に、既出の表1からは次の5点がわかる。<施し>は、第1に、[事例 e、j、l、o、v]のように、「邪視」「悪い夢」による災いの実現など現地ムスリム間で流通する因果解釈と関連しな

がら、心配事や不安を解消し日常生活を滞りなく過ごす有効な手段と認識されている。第2に、[事例 d、f、j、p、q、t、w]のように、「宗教」「スンナ sunna (預言者言行)」「善行」「天使」「神」「日陰 (=天国)」などの表現を伴い、イスラームの秩序により死後に天国へ行くための重要な手段とも認識されている。第3に、それは、イスラームの規範上では推奨行為だが、彼らの語りでは<富者の(宗教的)義務>であるかのように認識されている。第4に、[事例 t、v]のように、ハディース hadis (預言者言行録)などの規定⁶⁾に従う形で、障害者、生活貧窮者、病人、老人、寡婦など<社会的弱者>の優先的な保護をイスラームが命じていると理解されていることがわかる。その際、<施し>は、親戚や隣人などへのムルヴヴァト muruvvat (手助け)後の段階での行為だという認識も共有されていた⁶⁾。第5に、[事例 m、w]のように、<施し>の対象を決定する要素として、「乞食」の宗教性や外観上の貧窮さなどが重要だとする認識もみてとれる。その他、[事例 p]に象徴的なように、<対象を限定せず誰にでも施しをする>という社会通念も同時に存在している。

6. <物乞い - 施し>交渉

(1) 「乞食」が選択する物乞いの方法—主張、外観、身体の所作

ここでは、実際の相互行為場面の中で「乞食」たちが選択する物乞いの方法(主張、外観、身体の所作)に着目する。彼らは、施し獲得のために、物乞いパフォーマンス全体を通して、どのようなメッセージを潜在的贈与者に提示しようとしているのか。それを明らかにするために、主張内容と外観、身体の所作を記述し、それぞれの戦略を分析していく。

まず、物乞いの主張内容(n=17)をまとめた表2をみると、以下の訴えがあることがわかる。第1に、結婚、健康、願望など<①報恩のとりなし>である。第2に、イスラーム的なイデオロムの積極的な利用とその価値世界への積極的な乗り込みによる、長寿、交通安全、災い回避など<②イスラーム的な主張による報恩のとりなし>である。第3に、食費、援助、善行としての施しの要求など<③金品贈与の直接的依頼>である。第4に、身寄りのなさ、貧困、本当の乞食、障害者、寡婦、孤児など自らの<④境遇と属性>である。これらは、単独でも、組み合わせられた形でも、主張される。前者の場合、①と②が各3例ずつ[事例H、I、P/B、K、L]であった。後者の場合、①+③と③+④が各1例[事例D/A]、②+③が2例[事例E、Q]、②+③+④が7例[事例C、F、G、J、M、N、O]であった。

以下では、上記のうち7例が観察された主要な組み合わせパターン(②+③+④)を分析の題材とし、このパターンにみられる戦略について分析する。具体的には、物乞いの戦略が最もわかりやすく提示されている[事例C](④→③→②の順)を取り上げる。

ここから次の3点がわかる。第1に、彼は、「私は目がみえず、手も動かず、何も仕事をする事ができません」と述べ(④)、自身の未知性を少しでも解消しようとする。また、目がみえず働けない<私>を語ることにより、目がみえ働ける<あなた>が対置され、両者の間に伏在している優劣関係の鮮明化も試みられる⁷⁾。この背景には、表1の[事例k]のように、現代ウズ

ベキスタンでは各種社会保障が不十分だという共通認識がある。その結果、同時代人としての〈感傷の共同体〉が制定されうる。第2に、彼は、「私にお金を与えるなら」と述べ(③)、鮮明化された優劣関係を一層深め、現地ムスリムの間で自明視される〈富者の義務〉という道徳・宗教規範があてはまる関係を創出しようとする。この試みは、ムスリムとしての敬虔な信仰の意味を問うこととほぼ同義である。第3に、彼は、「皆さんのお金に神がバラカ baraka (神の恩寵) を与えますよう、ドウオ duo (個人的な祈り) をします」と述べ(②)、〈宗教の共同体〉を創出しようとする。ここでは、潜在的贈与者に報恩のとりなしを一方的に約束することで負い目感情の付与が、また返礼能力を示すことで報恩期待の高揚が図られている。つまり、潜在的贈与者に施しの契機を付与しようとする営為がみてとれる。このように析出される主張内容の戦略は、アメリカ都市のユダヤ人社会での施し行動を分析した社会学者ヘイルマンの主張と重なる (Heilman1975 : 373)。

次に、実際の相互行為における「乞食」の外観を観察すると、以下のことがわかる。高齢男性の場合、ドッピ doppi (民族帽) やサツラ salla (ターバン) を被り、タスピ taspi (数珠) を手に持ち、年長者の威厳を示す白い顎髭を生やすなど、イスラーム・民族的な要素が強調されていることが多い。彼らは自らの外観を積極的にデルヴィーシュのそれへと近づけているかにみえる。女性の場合も、ヒジョブ hijob (宗教スカーフ) やルモル ro'mol (民族スカーフ) を被るなど、イスラーム・民族的な要素が強調されることが多い。

表2: 物乞いの際の主張内容 (n=17/筆者作成)

	民族	性別	生年 (年齢)	場所	主張内容
A	ウズベク	女性	? (50代)	繁華街	パンのために助けてください。家族もいないし、誰も助けてくれません。お金がありません。食べるものもありません。本当の乞食です。嘘ではありません。
B	ウズベク	女性	? (?)	バス停留所	無事に着いてください。神自らがあなたたちをバロ balo (災い) から守りますように。
C	ウズベク	男性	1956 (47)	バス停留所	私は目がみえず、手も動かず、何も仕事をする事ができません。もし私にお金を与えるなら、皆さんのお金に神がバラカ baraka (神の恩寵) を与えますよう、ドウオ duo (個人的な祈り) をします。
D	ウズベク	女性	1969 (34)	駐車場	みなさんが帰りの道路で交通事故に遭わないように祈ります。サダカ (施し・任意の喜捨) をください。
E	ウズベク	女性	? (40代)	バザール	サダカをすれば、天国に行けるようにドウオをします。
F	ウズベク	女性	1954 (49)	バザール	私は孤児を養っています。できれば、サダカをください。あなたの思っていることが、上手いきますように。

和崎:人々はなぜ「乞食」に施しをするのか?

G	ウズベク	女性	? (50代)	バザール	夫が死んで、弟も妹も病気です。私には子供もいません。アッラーの道において助けてください。あなたの家族や親戚に病気の人がいれば、その病気が治るようにドゥオをします。サダカをください。
H	ウズベク	女性	1940 (63)	バザール	ドアを開けて、花嫁が入るよ、入るよ、入るよ。
I	ウズベク	男性	1922 (71)	バザール	稼いだお金がすべて結婚式に使われますように。
J	ウズベク	女性	1991 (12)	モスク	父も母もいません、私は孤児です。ノン (パン) のお金を出して帰ってください。アッラーが満足しますよう。みつけて、手に入れたものにバラカがありますように。
K	ウズベク	女性	1970 (33)	モスク	出された手が病気にならないよう、アッラーに頼みます。
L	ウズベク	女性	1966 (37)	モスク	アッラーが満足しますように。あなたのなされたどんな願いでも叶いますように。—?—。子供たちの幸福を見られますように。なされたドゥオが受け取られますように。みつけたものが結婚式で使われますように。
M	ウズベク	女性	? (40代)	モスク	障害者を助けてください。アッラーがあなたたちを助けますように。
N	ウズベク	女性	1945 (58)	モスク	私には孤児がいます。サダカをください。子供たちも一緒にドゥオをします。稼いだお金がバラカのお金になるように神に頼みます。
O	ウズベク	女性	? (60代)	モスク	あと4日後に、年金が出ます。それまで食べられません。神の道においてサダカをください。1つくれたサダカが1000となって返るように、神に頼みます。
P	ウズベク	男性	? (10代)	モスク	いつも元気で、そしてあなたが考えていることが上手いきますように。お兄さん。
Q	ウズベク	男性	1967 (36)	モスク	私へ与えられたエフソン ehson (モスクやイスラーム知識人、生活貧窮者などへの任意の喜捨) をアッラーが受け取りますように。なされた祈りが許可されますように、長生きしますように。どんな願いであなたがサダカを与えたとしても、その願いへとアッラーが到らせますように。私へ与えられたエフソンがあなたの顔の保護となりますように。あなたのダストゥルホン dasturxon (テーブルクロス) にある良いバラカが減りませんように。

最後に、「乞食」の身体所作には、潜在的贈与者に対し積極的な働きかけをほとんどしない場

合と、する場合とがあることが観察される。前者の場合、座り姿勢で無言であることが多い。具体的には、下を向く、お椀型の手を出す、赤ん坊を抱く、苦境(④)を書いた紙を置く、ハンカチや松葉杖などの道具を置く、障害をみせる、が主流である。ここでの戦略は、第1に、「乞食」の目線の位置が潜在的贈与者と比べて低い、つまり姿勢の低さによる従属の提示である。第2に、所作すべてが潜在的贈与者に対して憐れみを喚起させやすい、つまり印象操作による憐れみの誘導である。後者(積極的な働きかけをする)の場合、立ち姿勢で言葉による主張がなされることが多い。具体的には、ドイラ *doyra* など民族楽器を演奏する、民謡を歌う、ドゥオをするなどが主流である。ここでの戦略は、第1に、「乞食」の目線の位置が潜在的贈与者のそれと比較して大差がない、つまり姿勢の対等さによる関係の対等さである。第2に、民族音楽やドゥオによる<民族・宗教の共同体>創出の試みである。つまり、自己演出による印象の操作や一方的で積極的な働きかけによる負い目感情の付与などを通して、潜在的贈与者に施しの契機を付与しようとする営為がみてとれる。

(2) 施しの動機付けと行動

では、実際の相互行為場面の中での施しのあり様(動機付けと行動)に着目しよう。贈与者は、何を思って施しをしているのか。まず、通行人が施し直後に語った動機付け(n=22)をまとめた表3をみると、以下の理由が認められる⁸⁾。第1に、邪視による災いなど現地ムスリムの間で流通する因果解釈とも関連しながら、「頭痛の解消」「悪い夢をみた」「ノン *non* (パン)の売れ行き」「良い娘との結婚」など、日々の暮らしの中での不安解消や願望成就のためである。第2に、「善行だから」「ムスリムだから」「心がきれいになるように」「悪行の解消」など、自らの宗教生活のためである。これは、サダカの意義と関連し、ムスリムとしての敬虔な信仰の意味を問い直す作業といえる。しかし、[事例ソ、ラ]のように、「小銭があるから」「心が痛くて」など、施しは常にサダカの意義だけに基づいてなされる訳ではない。

表3 通行人による施しの動機付け (n=22。単位はスム。筆者作成)

	民族	性別	生年(年齢)	職業	施しの金額	動機付け
イ	ウズベク	男性	1985(18)	学生	20	大学に入れるように。
ロ	ウズベク	女性	1982(21)	花屋店員	10	年をとった乞食のドゥオ(個人的な祈り)をしてもらえば、良くなるから。
ハ	ウズベク	女性	1979(24)	露店商	20	最近仕事も悪くなったし、頭も痛いので、そのために。
ニ	ウズベク	女性	1974(29)	主婦	25	昨日悪い夢をみたから。
ホ	ウズベク	男性	1981(22)	ノン(パン)売り	20	善行のため、ノンが早く売れるように。

和崎：人々はなぜ「乞食」に施しをするのか？

へ	ウズベク	男性	1980(23)	コック	20	生活がもっと良くなるように。良い娘と結婚できるように。
ト	ウズベク	男性	1975(28)	会社員	50	善行のために。彼らを助けないとすれば、誰が助けるんですか？
チ	ウズベク	女性	1968(35)	裁判所職員	100	善行のため、両親が健康になるように。
リ	タジク	女性	1966(37)	露店商	10	商売が良くなるように、私が10スムあげたら、アッラーが100スム私にくれるように、世界が平和で子供たちが元気でいられるように。
ヌ	ウズベク	男性	1967(36)	銀行員	20	タシュケントに出張で来たのですが、明日仕事の昇進試験を受けるので。善行のためにも。
ル	ウズベク	男性	1965(38)	教員	20	善行のため、心がきれいになるように。
ヲ	ウズベク	女性	1960(43)	主婦	10	息子がタシュケントで働いているので、みに来ました。息子がいつも健康でいられるように、あげました。
ワ	ウズベク	女性	1954(49)	教員	20	善行のために。悪行がなくなるように。
カ	ウズベク	女性	? (40代)	露店商	50	今私はお金に困っていないし、彼は困っていたでしょう。お金があるから、あげました。神はいろいろな善行をみえています。そういう人たちに必ずお金を下さなくてはけません。彼らのためにではなく、神に金を出します。
ヨ	ウズベク	男性	1962(41)	会社員	20	ビジネスが良くなるように。サダカ(施し・任意の喜捨)をあげたら、良い結果が来ることをすぐに感じるのです。
タ	ウズベク	男性	1961(42)	タクシー運転手	25	いつも道路で車を運転しているので、バロ(災い)から守られるように。
レ	タジク	女性	1953(50)	露店商	10	商売が良くなるように。
ソ	メティス	女性	1944(59)	年金生活者	20	いつもあげます。今小銭があるので。
ツ	ウズベク	男性	1951(52)	教員	25	息子がこっちで勉強しています。家族をアッラーが守るよう、息子の所から無事にカシュカダリヤに帰れるよう、それと国がいつも平和であるように。

ネ	ウズベク	男性	1951 (52)	教員	15	イスラームではサダカとエフソン (モスクやイスラーム知識人、生活貧窮者などへの任意の喜捨) をしなくてはいけないといわれます。私たちはムスリムだから、あげなくてははいけません。善行になるようにと思い、助けました。
ナ	ウズベク	男性	1937 (66)	年金生活者	50	国が平和であるように。アッラーへの感謝の意味で。乞食も助けなくてははいけません。
ラ	ウズベク	女性	1932 (71)	年金生活者	ノン 1 枚	今結婚式から帰ってきたところで、あんなに年をとっている人が物乞いをしているなんて、心が痛くて、ノンをあげたんです。
(補足：[事例ソ]の女性の民族名称である「メティス」とは「混血」の意。彼女の場合、父親がウズベク、母親がタタール)						

次に、施しの頻度 (n=17) をまとめた表 4 をみていく。計測時間は 10 分間とし、「乞食」の年齢⁹⁾、外観の特徴、物乞いの方法、働きかけの回数、施しの回数の 5 点に注目した。計測の共通条件は、Gバザール、施し頻度が高まると予想される金曜日 (ムスリムの祝日) 以外、14～15 時、ウズベク人であることの 4 点とした。〈施しの回数〉を分析の軸とし、みていく。

表 4 で、施しを多く獲得した (5 回以上。2 分間に 1 回以上) のは、8 人 [事例 2～4、12～14、16、17] である。彼らの外観上の特徴は、障害、車椅子、ルモル (民族スカーフ)、妊娠、衣服の清潔さと不潔さ、ハンカチ、ドッピ (民族帽) などである。つまり、障害とそれに関わる道具、貧困や母子家庭のイメージ、イスラーム・民族的な要素を析出できる。物乞い方法は、お椀型の手を出す、例えばドゥオなど<イスラーム的な主張・身体所作による報恩のとりなし>を行う、ラジカセで音楽を流す、民族楽器を演奏するなどだった。同 8 人中、積極的な働きかけの動作遂行が難しい障害者 [事例 2、4] を除く全員が、言葉による主張と身体所作との双方により物乞いを行っていた。8 人の働きかけ回数は、0 回、1 回、11 回、62 回、58 回、80 回、56 回、音楽の継続的演奏であった。働きかけ回数が少ない前 3 人は、全員座り姿勢で、障害や妊娠という外観の特徴を有し、年齢 25～37 歳であった。一方、働きかけ回数が多い後 5 人は、全員立ち姿勢で、障害という外観の特徴を有するか、年齢 60 歳以上かであった。

逆に、施しを多く獲得できなかった (= 1 回未満) のは、9 人 [事例 1、5～11、15] である。彼らの外観上の特徴は、ルモル、裸足、衣服の不潔さ、手の震え、赤ん坊、杖、障害、ヒジョブ (宗教スカーフ) などである。つまり、障害とそれに関わる道具、貧困や母子家庭のイメー

ジ、イスラーム・民族的な要素が認められ、上述の施しを多く獲得した「乞食」たちのそれと大差ない。物乞い方法は、＜イスラーム的な主張・身体所作による報恩のとりなし＞を行う、お椀型の手を出す、苦境（④）の説明、障害の強調であった。だが、同9人中、言葉による主張と身体所作との双方により物乞いを行う人は3人だけであった。つまり、通行人への働きかけが活発だとより多くの施しを獲得できるが、それが弱いと施しをあまり獲得できない。なお、彼らの姿勢は座り姿勢7人[事例1、6～11]と立ち姿勢2人[事例5、15]であり、施しを多く貰った「乞食」の場合と比べて座り姿勢が多いことが特徴的だった。彼らの働きかけ回数は53回、1回、0回、0回、1回、0回、0回、0回、30回であった。働きかけ回数が少ない（0～1回）7人[事例5～11]は、全員が外観上障害を有さず、年齢40～62歳だった。一方、働きかけ回数が多い（30・53回）2人[事例1、15]は、外観上障害がなく、年齢25・65歳だった。

これら相互交渉の中での施し行動の観察は、動機付けという＜言説のふるまい＞とは別に、＜行動を実際に呼び起こす条件＞を明示する¹⁰⁾。ここでは以下の4点がわかる。第1に、通行人は障害や妊娠など＜労働の不可能性＞を暗示する外観上の特徴を有する人に施しをする傾向が非常に強い。第2に、通行人は高齢者に施しをする傾向がある。ただし、高齢者でも、働きかけなど施し契機の付与が十分であることが必要条件である。これが不十分だと、施しがなされない可能性は高まる。第3に、通行人は、外観上障害が観察されない限り、座り姿勢よりも、立ち姿勢の「乞食」に施しをする傾向がある。これは、座り姿勢（10人）での働きかけ回数（合計66回）が立ち姿勢（7人）での回数（合計287回＋継続）より大幅に少ないこと、つまり施し契機の不十分な付与に起因していると解釈できる。また、立ち姿勢で「乞食」が差し出してくる手の位置は座り姿勢でのそれに比べて施しを与えやすい位置（高さ）にあり、相互行為場面における2者間の距離が施し行動に影響を与えているとも解釈できる。第4に、施し行動のこうした傾向とは別に、その時々を通行人の思いつきなど気分によっても施しはなされる。つまり、現実の多様さがうかがえる。

表4：物乞いに対する施しの頻度(n=17。＜年齢＞は通行人2人が回答した「乞食」の推定年齢の平均値。＜働きかけ＞＜施し＞の単位は回数。筆者作成)

	性別	年齢	外観の特徴	物乞いの方法	働きかけ	施し
1	女性	25歳	ルモル ro'mol (民族スカーフ)。裸足。衣服の汚れ。	座り姿勢。両手でドゥオ（個人的な祈り）をする。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	53	3
2	女性	25歳	障害（体が硬直し、全身が「正常」に動かないようにみえる）。車椅子に乗っている。	座り姿勢。身体の所作なし。主張無し。	0	6

3	女性	37 歳	ルモル。妊娠（お腹が非常に膨らんでいるように見える）。衣服の清潔さ。	座り姿勢。お椀方にした右手を前方に差し出す。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	1	10
4	男性	31 歳	障害（上半身が急な角度で横に曲がっている）。灰色のドッピ doppi（民族帽）。	座り姿勢。お椀型にした右手を前方に差し出す。ラジカセで音楽を流す。主張なし。	11	10
5	男性	35 歳	青色のドッピ。小刻みな手の震え。衣服の汚れ。	立ち姿勢。お椀型にした右手を前方に差し出す。時に両手でドウオをする。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	1	4
6	女性	40 歳	ルモル。赤ん坊を抱いている。	座り姿勢。自らの＜境遇と属性＞と＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を厚手の紙に書いて置く。身体の所作なし。	0	4
7	女性	45 歳	ルモル。杖を置いている。	座り姿勢。お椀型にした右手を前方に出す。主張なし。	0	0
8	女性	55 歳	ルモル。	座り姿勢。お椀型にした右手を前方に差し出す。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	1	1
9	男性	50 歳	障害（両手首がない）。紫色のドッピ。缶を置いている。衣服の汚れ。	障害の強調する（ない両手首を前方に差し出し、みせる）。主張なし。	0	1
10	女性	60 歳	ヒジョブ hi job（宗教スカーフ）。杖を置いている。衣服の清潔さ。	座り姿勢。お椀型にした両手を前方に差し出す。主張なし。	0	4
11	女性	62 歳	ルモル。杖を置いている。	座り姿勢。自らの＜境遇と属性＞と＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を厚手の紙に書いて置く。身体の所作なし。	0	1
12	男性	60 歳	白色のドッピ。年長者の威厳を示す白い顎鬚。	立ち姿勢。両手でドウオをする。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	62	6

13	男性	60歳	紫色のドoppi。	立ち姿勢。両手でドゥオオをする。 ＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	58	16
14	男性	60歳	白色のサッラ salla(ターバン)。左手で杖を持っている。年長者の威厳を示す白い顎鬚。衣服の汚れ。	立ち姿勢。お椀型にした右手を前方に差し出す。＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	80	5
15	男性	65歳	青色のドoppi。左手で杖を持っている。年長者の威厳を示す白い顎鬚。衣服の汚れ。	立ち姿勢。右手でドゥオオをする。主張なし。	30	1
16	男性	90歳	タスピ taspi(数珠)。年長者の威厳を示す白い顎鬚。	立ち姿勢。両手でドゥオオをする。 ＜イスラーム的な主張による報恩のとりなし＞を述べる。	56	8
17	グループ (男性3人、 女性1人)	50～ 60歳	障害(盲目、全員)。黒色と青色のドoppi(共に男性)。ルモル(女性)。サングラス(男性)。杖を腕にかけている(全員)。補助者(非盲目)同伴。	歩き回る。男性2人が民族楽器を演奏し、そのうちの1人が民謡を歌う。もう1の男性が両手でドゥオオをする。女性は何もしない。	継続	18

7. むすび

本稿の目的は、ウズベキスタンの歴史・社会＝文化的文脈を考慮した上で、＜物乞い・施し＞交渉という相互行為場面を徹視的に分析することにより、施しをすることで人々は何を得るのかという問いを行為者内部から考察することであった。

まず、＜乞食＞＜物乞い＞＜施し＞という3つの概念がいかにかに認識されているかを検討し、次のことを明らかにした。ソ連時代の＜乞食＞＜物乞い＞は、法的に禁止された恥ずべき存在・行為であった。現在のタシュケントで＜乞食＞はソ連時代に唯一物乞い活動を許されていたルリに加えて多様な民族からなる人々だと捉えられていた。彼らは、その属性、つまり外観上の＜労働不可能性＞に応じて、共感対象とも、逆に排除の対象ともされた。前者の見方は、＜乞食＞＜物乞い＞を肯定的に評価するイスラームの秩序が再生したことにより、＜施し＞概念に積極的な価値が付与されるようになったという体制転換に伴う価値転換に由来した。さらに＜商売乞食でも施しをする＞という社会通念の存在も指摘した。後者の見方は、＜商売乞食＞が増加した結果、それへの反発に由来するとみなせえた。

ここから、第1に、現代ウズベキスタンで＜乞食＞＜物乞い＞の概念は、社会主義またはソ連型の近代化政策に起源をもつこれらを＜恥＞とする価値世界から、自己救済に不可欠なく助

けるべき存在>とする価値世界に属するものへと原則的に移行したと捉えられる。第 2 に、この価値世界の積極的な意味転換の背景には、再生したイスラーム、なかでも<施し>をめぐるサダカの規範とその実践意義の人々による積極的受容があると考えられる。

次に、<物乞い - 施し>交渉という実際の相互行為場面に着目し、<物乞いパフォーマンス (主張と外観、身体の所作)>と<施しのあり様>の 2 点を検討し、次のことを明らかにした。前者では、物乞いパフォーマンスを通して、<感傷・宗教・民族の共同体>など潜在的贈与者との一体感を志向するメッセージが提示されていた。さらに、同パフォーマンスでは、イスラーム的イデオロムの積極利用などサダカの意義に基づきながら、報恩を予め一方的にとりなすという戦略により、潜在的贈与者に負い目感情を付与する、また返礼能力を示そうとすることで、施しの契機を通行人に与えようとする営為がみてとれた。後者では、第 1 に、<施しの動機付け>として、サダカの意義に基づいて、外観上<働けない>人々を助けなければいけないという現地ムスリムの間で主流な共助の論理が示された。さらに、日常生活における災い回避や報恩期待など現地ムスリムの間で流通する因果解釈に基づく論理も、動機付けとしてみてとれた。第 2 に、観察された<実際の施し行動>を動機付けと照合した結果、動機付けという<言説のふるまい>で説明されなかったことは、座り姿勢よりも、立ち姿勢の「乞食」を施しの対象としてより頻繁に選択するという点だった。さらに、外観上<働けない>人々への施し行動に事例を絞り同一条件内での施し行動を比較・検討してみると、彼らのうち積極的な働きかけを活発に行なう人が施しの対象として選ばれやすいことが示された。

ここから、第 1 に、実際の<物乞い - 施し>交渉では、再生したイスラーム的価値世界、つまりサダカの意義が物乞いの際の根拠になるとともに実際に施しをする人々の動機付けにもなっていたことがわかる。第 2 に、施しは、サダカの意義や現地の因果解釈に基づく論理により、他者への慈善として、またそれ以上に日々の暮らしの中で感じる不安の解消など<助けることで助けられる>という自己へ帰する営みとして行われていたと考えられる。これがまた、施しをすることで贈与者が得る可能性のある<内的充足>の核をなすものだとも捉えられる。ただ、表 3 の[事例ラ]の「心が痛い」など<憐れみ>と呼びうる感情に起因した「選択以前の選択」(高橋 2006 : 831)によっても施しはなされている¹¹⁾。第 3 に、施し獲得における<立ち姿勢>の優位、つまり「乞食」と潜在的贈与者との間の物理的な<距離の近さ>が施し獲得により有利であったと考えられる。これは<姿勢の低さによる従属の提示>を重視する先行研究の批判的検討を迫るものである。第 4 に、施しは、贈与者の能動的判断よりも受動的反応に決定付けられ、なされやすいと考えられる。なぜなら、贈与者たちは、積極的な働きかけによる負い目感情の付与や返礼能力の提示など施しの契機を十分に投企してくる「乞食」に施しをする傾向があったからである。そこでは、施し契機の付与が不十分な「乞食」への施しの回避がみてとれた。それと同時に、あげやすさに繋がる糸口を含めたコミュニケーションにおける<接触のしやすさ>も施し行動を考える上で重要な要因であることが示された。

以上をまとめる。施し贈与者は、<労働の不可能性>という外観上の特徴を手がかりに、イ

スラームが命じる<社会的弱者>を優先しつつ、相互交渉の中で精神・物理的に<きっかけ>をより多く投げかけてくる「乞食」を対象として選択する傾向があった。ここでの主体性は、贈与者の能動性というよりも、むしろ相互交渉の中での受動性が契機となり発生していたと考えられる¹²⁾。また、贈与者は、<偽善者>とみられることの<気まずさ>など社会=文化・コミュニケーション的なスティグマに由来する施しへの躊躇を払拭した上で、<助けることで助けられる>という自己救済の思いをより確実に果たそうとしていたとも捉えられた。この思いを果たすことで得られる<内的充足>こそが施し行動の本質をなすものだとすれば、施しの社会=文化・コミュニケーション的なく正当さは贈与者の充足経験の濃淡を左右する要因になるだろう。一方、施しは、暮らしの中での些細な不安を自分自身から追い出すために、「乞食」の属性や周辺状況に関わらず、<あげたいから>という理由でも行われていた。ここでは、贈与者の能動的な主体性が発露されていたと考えられる。しかし、この場合も、相手がいなければ施し行為は遂行されえず、その意味で相互交渉は不可欠であり<助けることで助けられる>という構図は不変である。

〔謝辞〕 本稿の執筆に際して、京都大学大学院人間・環境学研究科の山田孝子先生と高橋由典先生から丁寧な指導と貴重な助言を頂きました。ゼミ発表でも、多くの先輩諸氏から助言・批評を頂きました。この場をお借りして謝意を表したい。

【註】

- 1) 本稿は「乞食」の語が<差別用語>だと認識した上でこの語をあえて用いる。「乞食」に相当するウズベク語は、①ガド gado やガドイ gadoy、②ティランチ tilanchi、③サダカチ sadaqachi などがある。『ウズベク語詳解辞典』では、①「貧乏人 kambagal」「貧困生活者 qasshoq」「ある物を窮乏し、必要とし、期待に身をこがして渴望する人」「物乞いによって日を過ごす人」(Ma'rufov 1981a : b.182)、②「人々から物を乞い暮らす人」(Ma'rufov 1981b : b.176)、③「サダカ sadaqa (施し・任意の喜捨)を求める人」(Ma'rufov 1981b : b.9) とされる。これら現地語は基本的に侮蔑的な意味を含む他称として広く使われている。以上の認識を基礎に現状をみると、「乞食」概念は現地の実態として存在すると考えられる。現地人は、民族楽器の演奏などで金銭獲得を目指す遊芸人のうち、盲人など障害者は「乞食」とするが、非障害者は「乞食」としていない。本稿でも、この認識に依拠し、前者のみを「乞食」範疇に含め、後者を同範疇から除外する。また、本稿では「乞食」の表記とは別に、<乞食>とも括弧を使い分けて記述している。これは、対象を具体・現実的なレベルで論じているのか(=「乞食」)、それとも抽象・観念的なレベルで論じているのか(=<乞食>)、という認識の経験層の差異に依拠している。
- 2) 本稿では、「行為」を「～しようと思つてする行動」と、また「行動」を「行為を含む人間のすべての活動」と定義する。

- 3) 体制転換後における「乞食」の<転落>の背景については、拙稿 (和崎 2007) を参照。
- 4) 例えば「2年以上生活できるお金があれば、税金のように貧しい人や乞食 gadoy にお金をあげなければいけません。イスラームがいています。革命前は特にそうでした。今はだいぶ薄れましたが、徐々に復活してきています」(ウズベク/60代/女性)などと語られる。
- 5) <社会的弱者(困窮者)>の優先的保護に関する記述は、ハディースでは<喜捨の書>に(牧野 2001)、そしてクルアーンでは2章 215 節や9章 60 節などにみられる(井筒 1957)。
- 6) 例えば「貧しい親戚に 10%以下を寄付し、いなければ近所の貧しい人を、そして最後に路上の人を助けます。昔からの伝承でイスラームに由来します」(ウズベク/男性/20代)などと語られる。
- 7) 身体的スティグマをもつ人は対人交渉でその奇異さを乗り越える術を知っている、と指摘される(Goffman 1963=1980 : 87-90)。その逆も可能であり、彼らはそれを知らせる術にも精通している。
- 8) <動機の話>論で著名な社会学者ミルズの知見によれば、動機付けとは、行為者内部で、ある行為の「真の動機」となる内的状態というよりも、人々が自他の行為を解釈し「説明」するために用いる「類型的な動機の話の構造」である(Mills 1963=1971 : 343-355)。本稿でも、基本的に、施しの<動機付け>を自己の行為の解釈に際して貼り付けられる<説明>とみなす。
- 9) 「乞食」が何歳にみえるか、贈与者と通行人が述べた年齢の平均値をここに示している。
- 10) ゴフマンの行為論について言及している社会学者・高橋由典は、「ゴフマンのいう表局域と裏局域の区別は、目標設定の次元と身体遂行の次元の区別」に対応し、2者間にはズレが生じることがあると述べている(高橋 2005 : 85-86)。本稿もそのズレに着目して分析するものである。
- 11) 目的合理性と価値合理性に続く行為選択の第3の基準である感情についての論考を進めている高橋の知見によれば、この種の感情に基づく「選択以前の選択」は「行為選択以前にすでになされてしまった選択」として「主体的選択をスキップした選択」だとされる(高橋 2006 : 831-832)。高橋は、この種の選択を「体験(出来事)の成立そのものが選択の内実をなす」という意味で「体験選択」と呼び(高橋 2006 : 832)、同概念を用いて独自の思考を展開している。<憐れみ>感情が個体内部における主/客区分の廃棄により実際の行為遂行へと至らせるそのプロセスについては、(高橋 2001)で詳細に論じられている。施し贈与をめぐるここでの推敲はすべて高橋の思索に負うものである。
- 12) 間身体関係の中で決定されてくる行為者の主体性をめぐる論考として(湯浅 1996)がある。

【文献】

- Abdullaev, B., 2003, "Tilanchida Or Bormi?", *Mustqil Gazeta* 10, May.
- Agadjanian, V. and Makarova, E., 2003, "From Soviet Modernization to Post-Soviet Transformation: Understanding Marriage and Fertility Dynamics in Uzbekistan", *Development and Change* 34 (3) : 447-473.
- Butovskaya, M., Salter, F., Diakonov, I. and Smirnov, A., 2000, "Urban Begging and Ethnic Nepotism in Russia- An Ethnological Pilot Study" *Human Nature* 11 (2) : 157-182.
- Goffman, E. 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc.

- (=1980, 石黒毅訳『スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- Goldberg, T. L., 1995, "Altruism towards Panhandlers: Who Gives?", *Human Nature* 6: 79-89.
- Heilman, S.C., 1975, "The Gift of Alms: Face-to-face Almsgiving among Orthodox Jews", *Urban Life and Culture* 3: 371-395.
- 保坂修司, 1994, 『乞食とイスラーム』筑摩書房.
- 井筒俊彦訳, 1957, 『コーラン (上)』岩波文庫.
- Igbinovia, P. E., 1991, "Begging in Nigeria", *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology* 35(1): 21-33.
- 小松久男, 2000, 『中央ユーラシア史』(新世界各国史 4) 小松久男編, 山川出版社.
- 牧野信也訳, 2001, 『ハディースII イスラーム伝承集成』中公文庫.
- Ma'rufov, Z.M.(tah.), 1981a, *O'zbek Tilining Izohli Lug'ati* I .
- , 1981b, *O'zbek Tilining Izohli Lug'ati* II .
- Mills, C.W., 1963, *Power, Politics, and People: the Collected Essays of C. Wright Mills* / edited and with an introduction by Irving Louis Horowitz, Oxford University Press. (=1971, ホロビッツ・I・L 編, 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房.)
- 西川麦子, 1992, 「バングラデシュの農村のムスリムの物乞, 「フォキール」・「フォキルニ」」『民族学研究』56 (4) : 385-404.
- Northrop, D., 2004, *Veiled Empire-Gender & Power in Stalinist Central Asia*; Cornell University Press, Ithaca and London Press.
- Ro'i, Y., 2001, *Islam in the Soviet Union- From World War II to Perestroika*, Columbia University Press.
- 高橋由典, 2001, 「イエスの沈黙命令」『Becoming』7: 58-71.
- , 2005, 「贈与制度の身体論的把握—クラとポトラッチ—」『フォーラム現代社会学』4: 82-95.
- , 2006, 「体験選択と開いた社会性」『社会学評論』56 (4) : 830-846.
- 和崎聖日, 2007, 「ポスト・ソヴィエト時代のウズベキスタンの『乞食』— 都市下位文化におけるイスラームと共同性」『文化人類学 (旧民族学研究)』71 (4) : 458-482.
- 湯浅泰雄, 1996, 「身体と間身体関係」, 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学 4 身体と間身体社会学』: 49-70, 岩波書店.